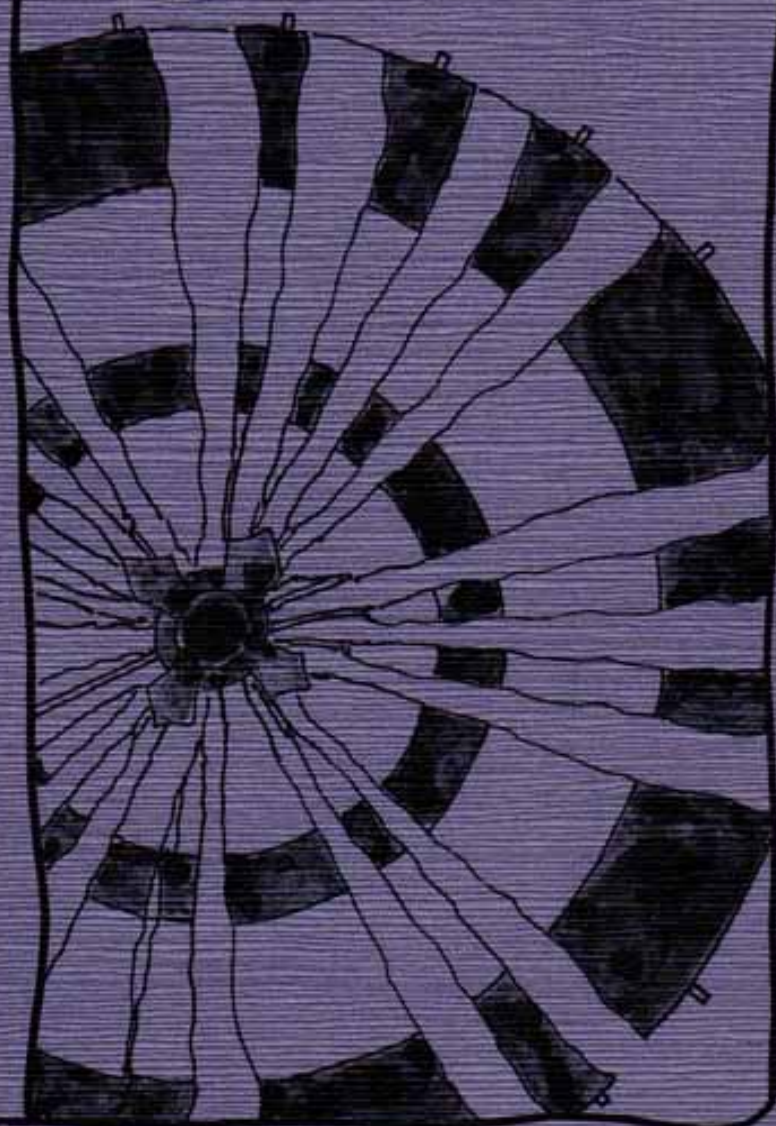


やぶれ傘



二二六号

二〇二三年六月

ここよりは砂地にかはる夾竹桃 根橋宏次

工場の脇を日傘の人がくる 大島英昭

混み合つてゐる保育園前口永 丑久保 勲

玄関を出てすぐにあるからす麦 きくちきみえ

かるの子のときに羽ばたく仕草して 廣瀬雅男

カルテラタン遠しと思ふ五月来る 藤井美晴

切れ目なき雲は明るし花卯木 渡邊孝彦

ひさびさの晴からし菜の花の土手 青谷小枝

露味噌は女将の手製栞で酒 瀬島酒望

降りさうな空晴れてくる夏の夕 小山よる

夏兆すうつすら残る種痘跡 有賀昌子

吸盤を見せさかしまに守宮かな 安藤久美子

小上がりに夕日差しくる洗ひ鯉 秋山信行

きのふより雨がちとなる花卯木 白石正朝

麦の秋道の先には道の駅 天野美登里

抄集句 傘 紀 大 崎 夫 選

春の空棒高跳びのパー越しに 木村瑞枝

製茶場の窓に茶埃日が落ちて 倉澤節子

朧夜の手帖に読めぬ走り書き 小泉里香

雨あがり真下から見八重桜 小巻若菜

測量の棒持つあたり花吹雪 柴崎和男

春雷のひとつが置いてゆく静寂 高橋 均

三里塚山も機影もかすみをり 竹内文夫

野漆や橋は車の数珠つなぎ 萩原溪人

四十雀の声の近くのベンチに居 萩原久代

春日傘花びら付けて窄めけり 本郷美代子

犬だけに興味もつ犬樟若葉 道林はる子

献眼をして逝きし妻五月雨 箕田健生

若葉風第三ボタンまで開けて 武藤節子

山沿ひを高く飛びつつ鳥帰る 石原健二

だつこ紐で移り来し子よ入学す 岩藤礼子

守宮

安藤久美子

自 転 車 で 桜 並 木 の 通 り 抜 け
 花 筏 ボ ー ト 近 く に ゆ ら ゆ ら と
 桜 蔭 降 る 門 前 の 制 服 屋
 水 道 の メ ー タ ー 傍 に 花 空 木
 初 夏 の 風 湯 島 の 坂 を 下 る バ ス
 鉄 柵 に 錆 ち ら ほ ら と 躑 躅 咲 く
 青 葦 へ 夕 陽 の 迫 こ ろ ほ ひ に
 砂 浜 を 裸 足 で 行 け る と こ ろ ま で
 俄 雨 羅 濡 ら す ほ ど と な り
 吸 盤 を 見 せ さ か し ま に 守 宮 か な

洗ひ鯉

秋山信行

蕨 つ む 釣 果 の 事 は 後 と し て
 旧 道 に 尾 灯 つ ら な る 花 の 雨
 春 の 野 を 棒 も つ 子 等 の 探 険 隊
 長 首 に 一 輪 さ さ れ 花 菖 蒲
 累 代 の 墓 石 の 崩 え て 青 田 中
 番 犬 の 寝 そ べ つ て ゐ る 青 葉 風
 箱 庭 の 街 灯 と も る 真 昼 時
 も ぐ ら 塚 あ た り に 群 れ て 夏 あ ざ み
 玄 関 の 玉 葱 に ほ ひ 来 る 夜 中
 小 上 が り に 夕 日 差 し く る 洗 ひ 鯉

花卯木

白石正躬

白梅の散りくる空のうすにごり
 風光る土手に莫塵しき早やお昼
 春の月流れなきごと川流れ
 松の木に向うの尾根の山桜
 土手草を刈つてそのままほつてあり
 大根に花を咲かせてしまひけり
 青草を足で掻き分け川岸へ
 きふより雨がちとなる花卯木
 鉢植糸の莢豌豆爽碗豆の花咲いて
 昔話をしながら畑の草を取り

麦の秋

天野美登里

荻若葉流れに古き丸太橋
 庭石のかたへに十二単咲く
 ままごとのたんぽぽ皿に山盛りに
 城跡に石垣のこり花菫
 老猫が雀隠れの中にある
 芋環の花おにぎりを結びぬる
 校庭につむじ風あり春惜しむ
 回送のバス飛ばし行く夏隣
 初夏の川の流れを呑む鳥
 麦の秋道の先には道の駅

卓上の桜小枝が満開に
明日は雨今日の内にと花の土手
棒立てて踏まれぬ様に初すみれ
ねむの木の遅く芽吹いて雨上る
明日からはきつと夏空日かみなり
ねむの木に芽吹き気配雨上がる
かかへる程の露の到来雨もよひ

奥田温子

地鎮祭の濟みし赤土堇草
ブルック塀の隙間隙間に踊子草
「おはよう」に「おはよう」返す暖かし
母の日の上生菓子に花添へて
露の臺精進揚げの一品に
防火槽の蓋埋めぬる花の屑
牡丹の白き大輪雨の中

神山市実

おもたせの鶯餅のやはやほと
春の空棒高跳びのバー越しに
月朧夫の忌日は過ぎてゆき
町は夏髪を短くするつもり
荷風忌に玉子三つでオムライス
麦の穂の出揃うてゐて午後は雨
古茶淹れる洗濯すこし後にして

木村瑞枝

茶畑の畝刈りそろへられて暮れ
ライラックゆれて上ゆくモノレール
製茶場の窓に茶埃日が落ちて
草むらをつかのま蛇がすべりゆく
校庭の蛇口上向きてまり花
そこら中咲いて零れて薔薇の花
西日差すロシア文学全集に

倉澤節子

蠟梅のひときは香る山家道
 寒月を赤く染めたる朝日光
 老いの身に浮かぶ思ひ出春うら
 人声に薄氷動く心字池
 節分や野川の水の遡る
 立春や葉の無き枝に鳩とまり
 晴れの日の桜の下ほの暗さ

黒澤次郎

春の朝ツピーツピーとシジュウカラ
 桜蕊降る抜け道の潦
 老木の伐られし跡に桐苗木
 花冷えの蒲団の中に猫もをり
 翡翠のぢつと動かず杭の上
 蚕豆を庭いっつばいに作る家
 裏庭に暫し見ぬ間の茂りあり

小池一司

下流へとやはらかき風クローバー
 花冷えの地下へ降りゆき喫茶店
 野良猫の斜め横断待つ遅日
 自転車の轍くねくね花の屑
 朧夜の手帖に読めぬ走り書き
 行く春の三回鳴いて翔つ鴉
 春の昼ゆつくり曲がる教習車

小泉里香

よく観れば蕾をひとつ初莖
 乗り換への駅へ小走り春時雨
 棒立てて出づる芽を待つ春の風
 高台に大学の塔木々芽ぐむ
 雨あがり真下から見八重桜
 朧月筆が進んで夜が明け
 ラジオからカノンの調べライラック

小巻若菜

椅子に掛け上着を脱ぎて桜餅
 夕暮れのビルの谷間の春ともし
 インターホン鳴りて鯉が届きけり
 箱根路の新型電車風光
 待ちかねし新車届けり夏の午後

坂本和穂

春の蚊が首の周りをふはふはと
 窓ガラス越しに花桃齒科医院
 春の水跳ね上げてゐる鯉の恋
 道端の凸凹をゆく春の蟻
 初夏の男坂ゆき山門へ
 信州の川の中州のリラの花
 水張つて棚田の光る若葉風

佐藤稲子

うぐひすの声きく皿を洗ひゐて
 壇ノ浦スカル舐みよしに春の潮
 春寒し外科医処方赤き粒
 備前堀ぼり川りに蛭取りゐて昼すぎで
 黒海に臨む教会ライラック
 キヤリアカーの置きある畦のいぬふぐり
 ウォーキングさなかの渴き酸葉吸ふ

眞田忠雄

春の雨轆轤で壺を挽いてゐる
 測量の棒持つあたり花吹雪
 春寒の朱墨持つ手に重さあり
 炊き出しも終はり蒲公英七つ八つ
 神楽坂の見番横丁花水木
 食進まらず猫が生節相伴す
 若者の薔薇のタトゥーや夏隣

柴崎和男

高橋均

春炬燵猫も近づかなくなりぬ
あれこれと悩みごとありねぎ坊主
一夜にして一気呵成に桜満つ
春雷のひとつが置いてゆく静寂
墨堤は葉桜ばかり荷風の忌
春嵐強風波浪注意報
二代目が代診をする夏の午後

高橋宜治

花冷えのベンチで食らふ握り飯
花びらをかき分け泳ぐ春の鴨
草を食む仔羊のゐて花吹雪
山の湖さざなみ立てて夏に入る
空映す流れの中の水草芭蕉
夕風に熱き湯に入る瀬戸の宿
明けゆく高原の道露涼し

ここよりは砂地にかはる夾竹桃 根橋宏次
工場の脇を日傘の人がくる 大島英昭
混み合つてゐる保育園前口水 止久保 勲
玄関を出てすぐにあるからす麦 きくちきみえ
かるの子のときに羽ばたく仕草して 廣瀬雅男
カルチエラタン遠しと思ふ五月来る 藤井美晴
切れ目なき雲は明るし花卯木 渡邊孝彦
ひさびさの晴からし菜の花の土手 青谷小枝
露味噌は女将の手製拵で酒 瀬島酒望
降りさうな空晴れてくる夏の夕 小山よる
夏兆すうつすら残る種痘跡 有賀昌子
吸盤を見せさかしまに守官かな 安藤久美子
小上がりに夕日差しくる洗ひ鯉 秋山信行
きのふより雨がちとなる花卯木 白石正躬
麦の秋道の先には道の駅 天野美登里

抄

集

句

傘

れ

ぶ

や

大崎紀夫選

春の空棒高跳びのバー越しに 木村瑞枝
製茶場の窓に茶埃日が落ちて 倉澤節子
朧夜の手帖に読めぬ走り書き 小泉里香
雨あがり真下から見る八重桜 小巻若菜
測量の棒持つあたり花吹雪 柴崎和男
春雷のひとつが置いてゆく静寂 高橋均
三里塚山も機影もかすみをり 竹内文夫
野漆や橋は車の数珠つなぎ 萩原漢人
四十雀の声の近くのベンチに居 萩原久代
春日傘花びら付けて窄めけり 本郷美代子
犬だけに興味もつ犬樟若葉 道林はる子
献眼をして逝きし妻五月雨 箕田健生
若葉風第三ボタンまで開けて 武藤節子
山浴ひを高く飛びつつ鳥帰る 石原健二
だつこ紐で移り来し子よ入学す 岩藤礼子